

私が欲しい情報～アクセスしやすい情報～

鈴木智晴

鹿屋体育大学

I. 純粋に実践現場に必要な情報とは？

「科学」や「論文」という視点を棚上げするという前提で以降の文章を読み進めていただければと思う。「純粋に実践現場に必要な情報とは？」という問いに対して、野球選手を経験し、現在は大学硬式野球部のコーチとして活動している筆者の回答は以下の図の通りである。

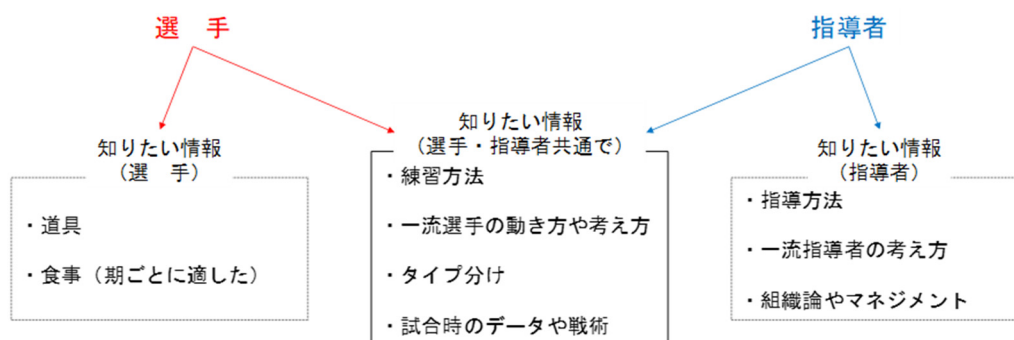


図1 実践現場に必要な情報

選手や指導者といった立場によって欲する情報に差異はあれど、多くの野球実践者が欲する情報は、上記のような情報であると考えられる。また、これらの情報が実践者にとって「発見(自身にとって新たな情報・知見)」なのか、「立証(自身の仮説を検証する情報・知見)」であるのかは、実践者の情報選択に大きく影響していると考えられる。「発見」を求めているのか、「立証」を求めているのかは、実践者の属する競技レベルや環境、その時々状況に依るが、多くは「発見」を求めていると考えられる。よって、「発見」となるような情報は実践現場にとって非常に貴重なものである。

さらに、これらの情報は「その選手に合った」や「そのチームまたは組織に合った」という条件が加わると、より貴重な情報になるのではないだろうか？パフォーマンス向上のために様々な取り組みをするうえで、その実践者に「合っているのか？」という条件は欠かせないものである。これは上記の図でいとうと「タイプ分け」にあたり、タイプ分けに関する情報も実践者にとっては非常に有益な知見になる。

例えば、「4 スタンス理論」や「鴻江理論」などは、ヒトをいくつかのタイプに分け、各タイプに応じた身体の動かし方やトレーニング方法などが示されている。これらのような情報は選手だけでなく、指導者も参考にすることが多いのではないだろうか？筆者自身も「自分に合った」練習方法・動き方・道具、指導対象である選手に合った練習方法・動き方、チームに合った指導方法という条件を加えて情報を探ることが多い。その情報の科学的「確からしさ」よりも、好奇心や興味で情報を選択することは往々にしてある。

これらを踏まえると、既存の理論に関する科学的根拠を示した情報や、科学的知見から生まれる新たなタイプ分けは「純粋に実践現場に必要な情報」と言えるのではないだろうか？

II. 手軽に情報を取得できることの優位性

実践者は、このような情報を書籍や雑誌、SNS や動画サイト、そして論文から取得し、日々のパフォーマンス向上に努めている。実践者が情報を取り入れる理由として、共感できる、興味が湧く、納得できるといった理由が挙げられる。加えて、その情報が手軽に取得できるものであるか？理解しやすいものであるか？というのは非常に重要な要素であると考える。

筆者がコーチを務める大学野球部においては、若い選手ほど書籍や論文よりも SNS や動画サイトからの情報を取り入れているように感じる。また、筆者自身も SNS や動画サイトを多く活用している。それらを踏まえ、各情報源と各条件を比較すると、筆者の考えとしては以下の通りである。

表 1 各情報源と各条件の比較

	科学的根拠	手軽さ	理解しやすさ
論文	○	×	×
書籍や雑誌	△	△	△
SNSや動画サイト	×	○	○

どの情報源が“良い”ということをここで論じるつもりはないが、SNS や動画の「手軽さ」というのは、実践者にとって非常に便利である。Twitter, Instagram, Facebook, Youtube などは、AI のアルゴリズムにより、そのサイトを利用する実践者の趣味・嗜好を分析し、実践者が好むであろう情報を自動的に提示している。これは、サイトにアクセスさえすれば、情報を探す手間を省き、その実践者にとって有益になりうる情報を得ることができることを示しており、書籍や論文ではこのようにはいかない（もちろん書籍も Web 上での購入であれば AI のアルゴリズムが働き、実践者が欲しい書籍が出てくるかもしれない）。また、Twitter や Instagram では短い文章や短い動画で情報を得ることが可能で、時間効率が高い。Youtube ではそれよりも長い時間の動画が多いが、中には聞き流すだけで有益な情報が手に入る動画もあり、視覚的な時間を奪われることがなく、こちらも時間効率が高いと考える。さらに、一流アスリートや一流指導者なども自身の練習方法や指導論などを Web 上で発信しており、そのような情報を手軽に取得できるということが SNS や動画サイトの強みではないだろうか？

III. 実践現場に向けた雑誌を目指して

本誌は「実践活動に直接寄与する知見を提供すること」という理念のもと、今まで様々な知見が提供されてきた。図 1 の内容に当てはまる内容はもちろんであるし、「タイプ分け」においては、本誌の事例研究が該当し、それらが集まることで個別性からある集団の共通性になることが期待できる。また他の学術誌にはない動画による図示などは、本誌の理念に基づくものであり、本誌は既に実践現場に必要な情報を提供し続けていると考える。

しかしながら、どんなに質の良い情報も「手軽」でなければ実践者の手元まで届かない可能性がある。「論文」という単語自体の持つハードルの高さはもちろんある。しかし、SNS や動画サイトのような「手軽さ」までとはいかないものの、書籍や雑誌のように「店頭に行けば手に取れる」のように、本誌の Web サイトにアクセスすれば欲しい情報が手に入るという「手軽さ」は比較的实现可能だと考える。

また、時間的な「手軽さ」を実現するために、論文を①スライド1枚にまとめる、②短編の動画にする、③A4サイズ1枚にまとめる、④まずは要約だけ読んでもらうような本誌の読み方ガイドを作成するなどの工夫はどうだろうか？もちろん、実現のためにクリアすべきハードルは低くないが、実践者が手軽にアクセスし、手軽に内容を理解するということは、本誌の理念に則っていると考える。

実践現場に向けた雑誌となるために、実践現場にとっての検索エンジンの役目を本誌が担えないだろうか？様々な情報を得ることが出来る時代からこそ、「手軽に」読める学術誌があっても面白いと思う。